

集合住宅における住様式の発展に関する研究（続）

（集合住宅から独立住宅への〈公私室型〉住み方の発展）

住田昌二
中島香代子
三枝小夜子
江口敦子
竹田喜美子

I 研究の課題と方法

1. 研究課題

(1) 前年度研究の要約

戦後の小住宅における住み方の発展は、大筋として、戦争直後から50年代にかけ、〈食寝分離型〉が定着していたプロセスと、60年代から今日にかけ、〈公私室分離型〉の住み方が普及しているプロセスの二つの時期に分けられる。このうち、後者のプロセスを解明することが、今日の住生活研究のなかではとくに重要と考え、私たちは、これまで、住宅の規模段階別に公共集合住宅3DK（50～60㎡）と民間マンション3LDK型（60～70㎡）を対象に、住空間の公私室分化に着目した一連の住み方調査を行ってきた。

調査結果を概括すると、公営・公団3DK型においては、住宅のプランが食寝分離型であるのに、住生活は全体として公私室分化要求が強くなっていることからくる住宅と住み方の矛盾を解決するため、3寝室のうち1～2寝室を私室化し、あとの居室をDKを含めて2室以上を〈ワンルーム化〉し、公室として使うという形の住み方が支配的であった。つぎに行った民間マンションの3LDK調査では、すでに確保されているLとDKを一体化し、さらにLに隣接する和・洋居室も連続して使うという〈公室拡大現象〉が顕著にみられた。

2つの調査に共通していた点は、子供の勉強・就寝室確保を通じての私室の独立化が早くすすむという点であった。したがって公共住宅3DK型、マンション3LDK型においても、子供室が分化独立していったあとの残余の空間についてみれば、前者における〈ワンルーム化現象〉にしる、後者における〈公室拡大現象〉にしる、その中身は、DKやL、さらには接客や家事に転用される夫婦寝室などが連続一体化した「公私重複」の住み方になっているところに大きな特徴がある。

このような公室空間の「公私重複性」は、前者の場合では、住宅規模が総体的に狭小でLがないところで、使い方の上でL的空間をしつらえようとして、それが不完全であるために現われてきている現象とみられるが、後者のようにすでにLが確保されているところでも同様にあらわれていることの解釈はむずかしい。60～70㎡

程度の住宅規模でとられるLは、公室として十分な面積を確保できておらず、そのため私室をもちこまざるを得ないということがあるかもしれない。しかし、公と私の空間をあえて分離せず、私的な性格の居室を適宜公室に転用するとか、あるいは逆に、ふだんは公室の一部に使っていることの多い空間を、私的な用途に転用するといった形の公私重複の住み方を、合理的な住み方として居住者自身が評価している面があるのも事実である。前年度の二つの調査からは、今日における住様式研究の課題が、住空間全体のなかで公室空間を如何に位置づけ、公室空間の機能分化をどう考えるかにあることが示唆された。

(2) 今年度研究の課題

78年度の研究は、上記のような前年度の基本的問題点の整理に立って、さらに住宅規模が大きく、公室空間の機能分化の容易な独立住宅（主として80～120㎡）を対象に、主として1階部分の部屋の使われ方がどのように分化しているか、住み方調査を通じて明らかにしてみる。1階部分の住み方に注目するのは、今日大都市圏において供給される独立住宅においては、2階建のものが圧倒的に多いことと、そこでの住み方は、大勢として2階部分の私室化が極めて顕著なため、これを除外することで、住空間の「公私分化」のメカニズムの解明について、明確な問題限定が行えると考えたからである。

分析にあたっては、公室の機能分化がかなり屈折した形ですすんでいるとの視点に立ち、それを解きほぐすため、つぎの4点に留意してすすめた。

- ①住生活行為のうち、公と私に分けられない中間的な行為が、1階部屋空間全体にどのように拡がっているか。
- ②各室の専用と転用の関係はどうなっているか。
- ③2室以上の連続的利用はどの程度みられるか、それが行われるのは何故か。部屋の独立性（他室と壁・ドアでセパレートされた状態）と専用性、連続性と転用性の間にどのような相関がみられるか。
- ④公室としての部屋の使われ方と起居様式はどのように対応しているか。

以下、分析は、これら4点の順にすすめる。

2. 研究方法

(1) 独立住宅のプラン分類

本調査の対象の選定に先立って、主として建売1戸建住宅（80～120㎡）について、公室群と私室群の分化傾向に着目して、平面型を分類整理し、そのパターン化を試みた。平面型の分類については、プレファブ住宅会社26社、大手建売住宅会社10社のパンフレットおよび住宅金融公庫平面図集78年度版に掲載されているプラン計804戸を対象とした。平面型の分類は、①玄関から各室への連絡形式、②K・D・Lの有無および連結形式、③和・洋室の別、④K・D・Lと他の部屋の連結形式、の4点を主な指標としてすすめた。

1階の公室群の相互関係によって、プランタイプを大分けすると、DKとLが隣接し、リビング・ルームが公室群の中心となる<<DK-L>>タイプと、DKとLの間に和室が入り、「茶の間」的の和室が公室群の中心に位置する<<DK-和>>タイプになる（図1-1）。

<<DK-L>>は、さらに3タイプに細分類できる。

<図1-1> 平面型の分類

1階部分の構成			戸数	百分率
プランタイプ	模式図			
計			804	100
DKとLが隣接するタイプ	DK・L		65	8.1
	DK・L/洋和		208	25.9
	DK・L・洋和		331	41.2
DKとLが離れるタイプ	DK・和/L		116	14.4
	DK・和・L		54	6.7
その他			30	3.7

(注) は2室間が1間以上の間仕切でつながるもの（プランタイプ符号では・印でつないだもの）

は壁かドアで仕切られるもの（プランタイプ符号では/印を入れたものを示す）

DKとLが開口部で連続している構成には変わりがなく、和室あるいは洋室が、さらにこれら2室に戸ブスマで連結する<DK・L・和>と、壁で仕切られた形でつながる<DK・L/和>と、それに1階が<DK・L>の公室だけから成り、私・洋居室の無いタイプである。全平面のうち、<DK・L・和>がもっとも多く、41%を占め、あとの2つは、それぞれ、26%、8%である。一方、DKとLの間に和室が入るものは、DKと和室は開口部で連続していて、和室とLの間も開口部で連なる<DK・和・L>（7%）と、壁で仕切られている<DK

K・和/L>（14%）に分かれる。（図1-1）の「その他」は、DK、L、和室の各室が壁で仕切られているものと、台所に和室が隣接するKタイプのものがある。

(2) 調査対象の選定

以上の平面型分類に対応して、住み方調査の対象を（図1-2）のごとく選定した。平面型分類の場合と同様に、調査対象も一戸建の建売分譲住宅から選んだ。これは、事前にプラン入手が可能なので平面型分類に照らして典型タイプを選定し得ること、同一タイプを複数戸調査し得ることによる。（図1-3）は代表的なプラン例である。

調査対象世帯は、<<DK-L>>が、各室の独立性の高いものから低いものまで44戸、<<DK-和>>が10戸の計54戸である。調査は、各住宅についてプランと家具配置を採取するとともに、主婦を対象とし、住み方についてのインテンシブなヒアリングを行うという方法をとった。調査期間は、予備調査が1978年10月、本調査が同年11月であった。

調査対象世帯の主たる属性は、①4～5人の核家族、②世帯主は35～45才で、大手企業に勤務するホワイトカラー、③主婦は無職層、④家族の成長段階は、長子が小学校の世帯がもっとも多く、他は、子供の無い世帯から大学生、有職者の世帯まで均等に分布するという4点が特徴的であった。大まかにはホワイトカラー上層といえよう。

II 住生活行為の公・私室分化

まずはじめに、住戸内で、主たる生活行為の公・私室分化がどのようにすすんでいるかについて検討してみる。本稿では、生活行為を便宜上、<公>と<私>と両者の<中間>に3分類し、各生活行為のDK、Lの公室、その他の居室への拡がり方をみるという方法をとった。主たる住生活行為について、食事・だんらん・接客を<公的生活行為>、就寝・勉強を<私的生活行為>とみなし、公にも私にも分けきれず、家事室や納戸といった形で居室の専用化要求を促す要因となる家事・更衣を<中間的生活行為>とした。

1. 私的生活行為

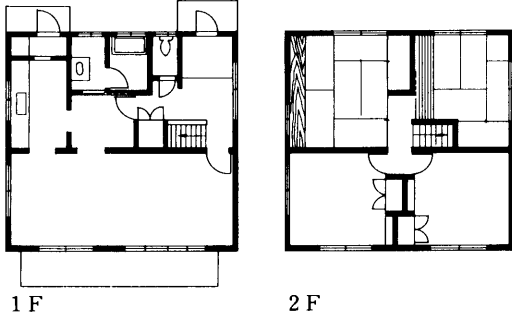
(1) 私室の確立度

就寝や勉強に使われる居室が、特定の家族成員の専用にかまされる住み方、すなわち、<私室>がどの程度確立しているのか、これらの行為は、住戸内のどこで行われているか検討する。本稿では、DK、L以外の居室の利用状態が、（表2-1）にあげた家族成員と生活行為

〈図1-3〉 調査対象住宅の平面図

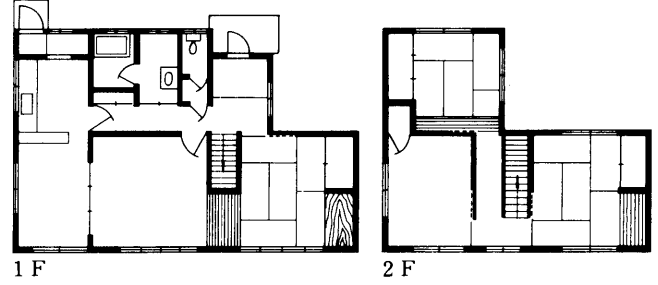
〈DK・L〉

延床面積：118.81㎡ H電鉄・木造



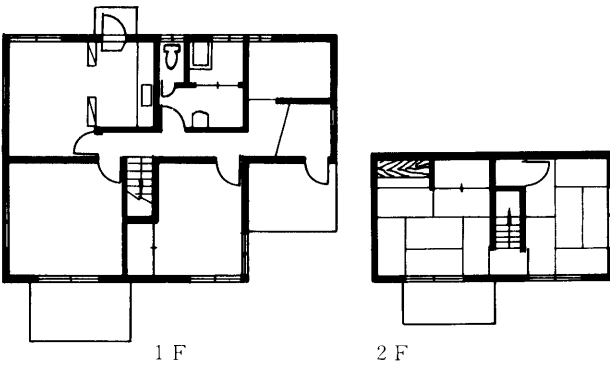
〈DK・L/和〉

延床面積：118.81㎡ H電鉄・木造



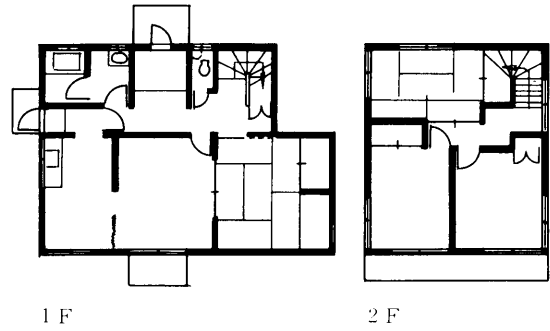
〈DK/L/洋〉

延床面積：96.23㎡ Dハウス・プレハブ



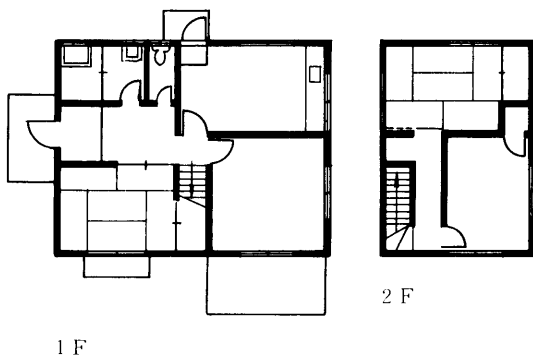
〈DK/L/和〉

延床面積：107.80㎡ Sハウス・プレハブ



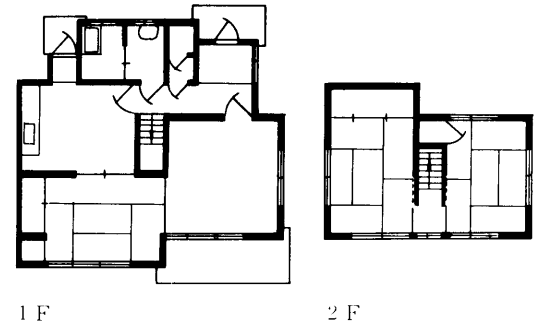
〈DK/L/和〉

延床面積：83.96㎡ Dハウス・プレハブ



〈DK/L/和〉

延床面積：87.74㎡ H電鉄・木造



<図1-2> 住み方調査対象住宅一覧

プラン分類			模式図		調査対象戸数	住宅種別	供給宅体	団地名	所在地	分譲年度
大分類	中分類	小分類	1階	2階						
<<DK-L>>	<L DK>	DK・L	DK	□□□	2	プレファブ建売	大和ハウス	青葉台	大阪府和泉市青葉台	S50~
		K・DL	K DL	□□□	2	木造建売	阪急電鉄	さわりぎ地	茨木市大字沢良宣浜	S49~
	<DK/L/洋>	DK/L/洋	DK L 洋	□□	4	プレファブ建売	大和ハウス	青葉台	大阪府和泉市青葉台	S50~
	<DK/L/和>	DK/L/和 (3居室)	DK L 和	□□	2	"	"	"	"	"
		DK/L/和 (4居室)	DK L 和	□□□	1	木造建売	阪急電鉄	さわりぎ地	茨木市大字沢良宣浜	S49~
	<DK・L/和>	DK・L/和 (3居室)	DK L 和	□□	7	プレファブ建売	大和ハウス	青葉台	大阪府和泉市青葉台	S50~
		DK・L/和 (4居室)	DK L 和	□□□	8	木造建売	阪急電鉄	さわりぎ地	茨木市大字沢良宣浜	S49~
		K・DL/和 (4居室)	K DL 和	□□□						
	<DK・L・和>	DK・L・和 (3居室)	DK L 和	□□	9	木造建売	"	石京の里上牧団地	京都市西京区大原野上里高槻市大字上牧	S43~ S44~
		DK・L・和 (4居室)	DK L 和	□□□	7	プレファブ建売	セキスイハウス	さくら丘	交野市天野ケ原	S51~
		DK・L・和/和 (4居室)	DK L 和 和	□□	2	"	"	"	"	"
	<<DK-和>>	<DK・和・L>	DK・和・L	DK 和 L	□□	4	木造建売	阪急電鉄	石京の里	京都市西京区大原野上里
DK・和・L/和			DK 和 L 和	□□	5	"	"	上牧団地	高槻市大字上牧	S44~
DK・和・L・和			DK 和 L 和	□□	1	"	"	"	"	"

<表2-1> 和室確立の基準

家族員	生活行為	同室可能な家族員	
夫 婦	就 寝	小学生低学年以下の子供	
子	大学生以上		就 寝
	中学生・高校生		就寝・勉強
供	小学生高学年	就寝・勉強	高校生以下の同性、小学生低学年以下の異性
	老人	就 寝	無

(注) 「小学生低学年」は、1~3年生を指す

に限定されている場合、私室として確立されているとみなすことにする。

私室の確立の仕方は、(表2-2)のように分かれる。

<表2-2> 私室の確立度

確立している私室との関係	計	主のみ	主+1室	主+2室	主なし			私室なし
					1室	2室	3室	
計	54	11	15	3	9	6	3	7
必要私室数より1室多い	11	-	9	2	-	-	-	-
必要私室数に等しい	20	9	4	1	3	1	2	-
必要私室数に1室不足	17	2	2	-	3	5	1	4
必要私室数に2室不足	5	-	-	-	3	-	-	2
必要私室数に3室不足	1	-	-	-	-	-	-	1

(注) 「主」とは、主寝室すなわち夫婦寝室を指す。

私室確立の基準にもとづいて必要私室数を求め、実際に確立している私室数と対比すると、1~3室の不足が54例中24例みられる。必要私室数は、1~3室であるが、調査対象住宅は、DK、L以外に3~4居室あるものが多く、私室を確立することが十分可能であることから考えて、住宅規模の拡大や居室数の増加が必ずしも私室確立に結びつかないことを示している。私室の確立度が低いのは、夫婦寝室(54%)であり、長子が中学生以上の世帯でこの傾向が顕著である(表2-3)。

<表2-3> 私室確立と長子年齢との関係

長子年齢	確立している私室計	主のみ	主+1室	主+2室	主なし			私室なし
					1室	2室	3室	
計	54	11	15	3	9	6	3	7
小学生低学年以下	26	10	10	1	3	-	-	4
小学生高学年	4	1	1	-	-	-	-	2
中学生	7	-	1	-	3	2	-	1
高校生	7	-	1	2	-	2	2	-
大学生以上	8	-	2	-	3	2	1	-

プランタイプでは、<DK・和・L>で、とくに確立度が低い(表2-4)。これは、DKに隣接する和室が、

＜表 2-4＞ 私室確立とプランタイプとの関係

確立している 私室 プランタイプ	計	主 のみ	主 + 1室	主 + 2室	主 な し			私室 なし
					1室	2室	3室	
計	54	11	15	3	9	6	3	7
<DK・L>	4	2	1	—	—	—	—	—
<DK/L/洋>	4	—	3	—	—	—	—	1
<DK/L/和>	3	—	1	—	—	1	—	1
<DK・L/和>	15	3	6	2	3	—	—	1
<DK・L・和>	18	4	4	1	2	2	2	2
<DK・和・L>	10	2	—	—	3	3	1	2

夫婦の就寝やだんらん・家事などに転用され易いというプラン上の特性からきている点が大き。夫婦寝室に比して、子供室は私室確立度が高く、「小学生高学年以上」の子供のうち、73%がそうになっている。私室の確立は、まず子供室の専用化から進行しているといえる。

(2) 子供室の私室確立度

夫婦の就寝は、1階または2階の居室に分かれる。2階居室の場合は、私室の確立度は高く、1階居室の場合は、逆に低い。子供の就寝・勉強は、ほとんど2階で行われる。子供の成長につれ、2階居室が子供室として私室化するとともに、夫婦の就寝は、1階居室中心に行われるようになる傾向がある。子供数に応じて私室がとられるようになるため、夫婦就寝が2階からはみ出さざるを得ないと、1階に就寝する方が、夜間、家の用心によいためと考えられる。1階にとられる夫婦寝室は、DKやLなどの公室との位置関係からみて、公的・中間的行為と重複する可能性が強くなり、一般的には、私室の確立度は低くなるといえる(表2-5)。

＜表 2-5＞ 夫婦寝室の私室確立度

居室位置	確立度	計	私室確立	私室未確立
計		54	29	25
2階		30	25	5
1階		20	4	16
2階と1階		4	—	4

小学校高学年以上の子供の私室のとられ方をみると、子供1人で1室を確保し、就寝と勉強をその部屋で行う就寝室兼勉強室になっているものももっとも多く、2階に私室が確立している子供室38例のうち26例(68%)を占めている。

＜表 2-6＞ 小学生高学年以上の子供の私室

とられ方 居室位置	計 (室)	就寝室兼勉強室 を1室とする場合		就寝室と勉強室を各々 1室ずつとする場合			未確立
		1人用	2人用	1人用	2人用	3人用	
2階	48	26	6	2	2	2	10
1階	2	—	—	—	—	—	2

2. 公的生活行為

(1) 食 事

54戸のうち53戸が、食事場所として、「主としてDK」を使っている(表2-7)。このうち23戸はD

＜表 2-7＞ 食事が行なわれる部屋

行なわれる 部屋 プランタイプ	計	主としてDKを使う場合				DKを使わ ない場合
		DK のみ	DKと L	DKと 1階和室	DKと Lと 1階和室	1階和室
計	54	23	15	14	1	1
<<DK-L>>	44	19	15	9	1	—
<<DK-和>>	10	4	—	5	—	1

Kのみを使い、あとの30戸は、時と場合によって、食事場所が移動している。冬季や来客時に1階和室やLに移動しているものが多い。プランタイプ別にみると、<<DK-L>>では、1階に和室があっても、DKに隣接するLへの移動が多く、一方、<<DK-和>>では、和室がDKに隣接しているため、それへの移動が多い。

(2) だんらん

だんらんには、54例のうち45例がLを使い、残りの9戸はLを使わない(表2-8)。9戸のうち5戸は、

＜表 2-8＞ だんらんが行なわれる部屋

行なわれる 部屋 プラン タイプ	計	主としてLを使う場合			Lを使わない場合		
		Lのみ	Lと DK	Lと 1階 和室	DK のみ	1階 和室 のみ	DKと 1階 和室
計	54	27	14	4	1	6	2
<<DK-L>>	44	26	12	2	1	3	—
<<DK-和>>	10	1	2	2	—	3	2

<DK・和・L>型である。DKに隣接する和室がだんらん空間として定着しやすく、DKと離れた位置にあるLは、接客空間化しやすいことがうかがえる。<<DK-L>>型プラン44戸のうち、Lを使わないものが4戸ある。その内訳をみると、2戸は家族形態と関係していて、1戸は老人同居世帯、1戸は欠損家族である。あと2戸は、生活スタイルが影響しており、1戸は、主婦の趣味の関係でとくに接客要求が強く、Lを接客室化しているもの、もう1戸は、家族成員全員が成人していて、生活時間が全くずれるため、DKがだんらんの場となり、Lは家事用に使われている。

だんらんにLを使う45戸のうち、「Lのみ」は27戸で、残りは、DKや1階和室にだんらん空間が広がっている。この<だんらん拡散現象>は、前年度の集合住宅の住み方調査でもみられたことであるが、その要因として家族員の生活時間構造のズレが考えられる。

(表2-9)は、夕食の揃い見合をみたものであるが、「日による」「ほとんど揃わず」「休日のみ」が、54戸

<表 2-9> 長子年令別夕食の揃い具合

	計	毎日全員	日による	ほとんど揃わず	休日のみ
計	54	7	13	11	23
子供無し	3	2	1	—	—
幼児	8	1	1	2	4
小学生	20	1	4	2	13
中学生	8	2	2	—	4
高校生	7	1	1	4	1
大学生・成人	8	—	4	3	1

中41戸を占めている。家族の成長段階別にみても、長子が「中」「小」「幼」において、揃わない例が少ない。このように夕食に揃いにくいことが、「夕食後の休息」という形でもっともあられやすいだんらんの阻害条件になっていると考えられる。家族員は、この点をカバーしようとして、例えば、遅く帰ってきてDで食事をする世帯主、Kで片づけをしている主婦、Lでテレビをみている子供との間で、それぞれが「ながら参加」の形で、家族のコミュニケーションをはかっているのが多いのではないかと推察される。だんらんがLに固定せず、DKや1階和室に拡がっていることの背景には、わが国ではヨーロッパのようにデナーのあとの休息が、即だんらんという固定したイメージがなく、だんらんを求める行動様式が家族によってかなり異なることもあろうが、生活時間のズレを「ながら参加」で回復しようとするだんらん要求が、公室を拡大する住み方を通じて達成されている一面もあると考えられる。

(3) 接客

接客の特徴点を、来客の種類別にみると、来客の全くない世帯は2戸しかなく、52戸では何等かの来客を迎えており、その種類は、「親戚」がくる世帯がもっとも多く41戸、以下「近所の人」29戸、友人28戸、仕事関係21戸となっている(表2-10)。接客にはLが

<表 2-10> 接客行為の行なわれる部屋

(来客の種類別)

<多項目選択>

来客の種類	計	DK	L	1階居室	2階居室	無
近所の人	54	8	11	3	—	25
友人	54	9	14	4	—	26
親戚	54	14	30	11	—	13
仕事関係	54	1	16	14	1	33

もっとも使われ易いが、客の種類によって各室が使い分けられる傾向がある。近所の人など気軽な客や主婦の客はDK、仕事関係など気のはる客や世帯主の客は1階居室が使われやすい。接客内容は、「対話」「食事」「宿泊」に大分けできるが、(表2-11)に示すように、来客別に部屋が使い分けられているのがわかる。とくに、

<表 2-11> 接客行為の行われる部屋

(行為の種類別)

<多項目選択>

接客行為の種類	計	DK	L	1階居室	2階居室	無
会話	54	25	52	37	1	2
食事	54	51	—	39	—	2
宿泊	54	—	—	28	22	9

「1階居室」が気のはる客の応待や客の食事や宿泊の場となりやすく、接客空間として重要な位置を占めているのがわかる。

3. 中間的生活行為

(1) 家事

住戸内での家事行為は、(表2-12)に示すように種

<表 2-12> 家事行為の分類

分類	内容
衣生活に関するもの	洗濯、衣類整理、アイロン掛け、縫い物
食生活に	炊事
住生活に	掃除、手入れ
家庭運営に	家計簿づけなどの記帳
家族の世話に	育児、教育、老人の世話
趣味・仕事	趣味、習い事、内職

々雑多なものに分かれるが、ここでは、1階公室内で行われるのが多く、かつチェックの容易な「記帳」「アイロン掛け」「衣類整理」「縫い物」「趣味・内職」をとりあげてみる。

各家事行為がどの部屋で行われているかをみると、(表2-13)のようになる。「記帳」にはDKが37例

<表 2-13> 家事行為の行なわれる主たる部屋

家事行為の種類	計	DK	L	1階居室	2階居室	無
記帳	54	37	6	10	—	—
アイロンかけ	54	10	19	15	9	1
衣類整理	54	5	19	20	10	—
縫い物	54	4	10	20	19	1
趣味・内職	54	5	7	20	5	17

で多く、「アイロンかけ」「衣類整理」はLか1階居室、「縫い物」は1階居室と2階居室に分かれやすい。「趣味・内職」も盛んで、約7割の主婦が行っているが、これらには、1階居室が主として使われやすい。このように家事行為は、その種類によって、DK、L、居室を使い分ける傾向が顕著である。Lは日常的に頻度の高い衣類整理やアイロンかけに、1階居室は縫い物や趣味・内職など散らかりを生じる家事や一定の広さを必要とする家事に使われやすい。家事行為は住戸内の全体の部屋に、公・私室の分化という目安にかかわりなく拡がっている

傾向がみうけられる。

(2) 更衣・収納

更衣は、入浴時の脱衣、日常の身支度、外出着の着替えなどに分れるが、ここでは日常の身支度に限定してみる。更衣の場は、1階・2階居室が中心であるが、子供については、DKやLで行う場合が24%あり、接客・家事と同様に、DKやLの両方が使われている。本人が就寝している居室での更衣が約半数を占めるが、残り半数は、本人が就寝する居室以外で行われ、食事・だんらん・接客・家事などのさまざまな行為と重なりを生じている(表2-14)。

<表2-14> 更衣の行なわれる主たる部屋

家族員	回答人数	DKorL	1階居室	2階居室	その他
世帯主	53	6	25	21	1
主婦	53	3	28	21	1
子供	105	25	21	57	2
老人	5	—	4	1	—

また、収納の方式が、更衣の場所や仕方を規定している面もみられる。衣類の収納方式は、家族の衣類を1~2室に集める集中収納が24例、分散収納が30例となる。後者は、子供室確立とともに高くなり、「中・高校生」で50%、「大学生」で63%と上昇しているが、8割、10割にならない点を注目すべきであろう(表2-15)。更衣を私的な行為として各就寝室で行なおうという家族各員の要求よりも、衣類の整理、収納を担当する主婦の家事労働の合理化要求が優先されているためと考えられる。更衣・収納などの中間的行為が公室と結びつくひとつの理由はそこにある。

<表2-15> 長子年齢別衣類の収納方式

収納のしかた		計	長子年齢			
			無・幼	小	中・高	大以上
計		54	11	21	14	8
集中収納	1室集中収納	13	2	9	1	1
	2室集中収納	11	6	4	1	
	その他分散収納	11		4	5	2
分散収納	私室分散収納	19	3	4	7	5

4. 生活行為の公・私室分化傾向

(1) 公的行為と私的行為の分離

以上において、公・私・中間的生活行為が住戸内のどこで展開されているかをみたが、このうち、前二者に注

目し、「公」と「私」が部屋単位にどのように重なっているかみてみよう。

就寝・勉強は1階・2階の居室で行われる。2階居室の子供室として私室化が顕著なのは、すでにみた通りである。一方、公的生活行為のうち、「食事」・「だんらん」は、ほぼDK、Lに定着している。問題は「接客」で、その行為場所は、かなりの拡がりを見せ、夫婦就寝の場との重複も多い。そこで、公的生活行為を、「接客」をのぞく「食事」・「だんらん」に限定し、これと私的生活行為である「就寝」「勉強」との分離あるいは重複の傾向をみてみると、(表2-16)のようになる。

<<DK-L>>では44例中38例で、公・私室分離が達成されている。一方、<<DK-和>>では、DKに隣

<表2-16> 生活行為の分離と重複

プランタイプ	計	分離	重複
計	54	43	11
<<DK-L>>	44	38	6
<<DK-和>>	10	5	5

(注)「分離」とは公的生活行為と私的生活行為がいずれの部屋においても重ならないもの、「重複」は重なるもの

接する部屋が、転用性の強いタタミの和室であるため、公・私にまたがるさまざまな行為の集中が生じやすく、10例中5例に「重複」があらわれている。

(2) まとめ

以上の検討結果をまとめると、つきのごとくである。

①2階部分は、私室とりわけ子供室としての確立度は高く、ここには公室的機能はほとんど及んでいないといえる。

②公的生活行為を「食事」・「だんらん」に限定し、私的生活行為として「就寝」をとり、公・私室分離をみると、「分離」されている住宅が、とくに<<DK-L>>型において多い。

③結局、公・私分化が不明確になっているのは、1階空間であり、そこにおいて、接客の行為や家事・更衣などの中間的生活行為が、<転用>を基調とする住み方となって、公・私にまたがって展開しているためである。

III 公室空間の転用度と連続度

IIのまとめから、2階部分には公室的機能が及んでいないと判断してよく、住空間の公・私室分化のメカニズムをみるためには、1階部分の使われ方の分析に限定してよいことが明らかとなった。そこで、以下、対象を1階に絞り、<1階部分=公室空間>とみなし、その機能分化がどのようにすすんでいるか、2つの点から明らか

にする。

ひとつは、1階各室は公室機能にどの程度専用化されているか、逆にいうなら、中間的・私生活行為への転用がどの程度認められるかという点である。いま一点は、先に指摘した<公室拡大現象>に関連し、公室を機能に応じて壁ではっきり細分するのでなく、K、D、L、さらにそれらに隣接する和・洋の居室を空間的一体化して利用する傾向が、住み方調査の各事例にわたって明瞭にみられた現象を分析することである。各部屋の連続化が強まることと、使われ方における転用度が高まることの間にかわめて相関性が強いと考えられる。逆に各部屋の独立性が強くなると、部屋の連続化の傾向は弱まるはずである。現状において1階部分の公室の機能分化が明瞭にすすまないのは、<転用化要求>と<連続化要求>がからみついた形であらわれているためであるとの仮説を立て、それを検証する形で、Ⅲの分析をすすめる。

1. 1階各室の専用性・転用性

(1) DK

DKが食事に専用化しているのは10例で、他は家事や接客に転用されている。DKは、食事の場であると同時に、炊事、記帳といった家事の場であることを示している。また食事や家事にかかわって、近所の人などを対象とした気軽な接客にも転用されることが多い(表3-1)。

<表3-1> DKの使われ方

主たる行為 重なる行為 プランタイプ	計	食 事				その他
		無	家事	接客	家事 接客	
計	54	10	18	4	20	2
<DK・L>	4	—	—	—	4	—
<DK/L/洋>	4	1	2	—	—	1
<DK/L/和>	3	2	—	—	1	—
<DK・L/和>	15	1	5	2	7	—
<DK・L・和>	18	5	5	1	7	—
<DK・和・L>	10	1	6	1	1	1

DKの専用度は、当然プランタイプの影響を受けやすい。1階にDK、L以外に居間がない<DK・L>でもっとも転用性が高い。逆に、DKとLが壁で仕切られている<DK/L/洋>、<DK/L/和>においては、DKの食事スペースへの専用化が顕著である。

(2) L

Lがだんらんに専用化しているものは4例のみで、接客や家事に転用されるものがきわめて多い(表3-2)。

だんらんと接客が重なる場合は接客の場としての性格を強める。さらにその上に、家事が加わる場合がもっとも多い(50%)。Lは単にだんらん空間というよりも、

<表3-2> Lの使われ方

主たる行為 重なる行為 プランタイプ	計	だ ん ら ん				接客	家事
		無	家事	接客	家事 接客	無	無
計	54	4	1	15	27	6	1
<DK・L>	4	—	—	—	2	—	—
<DK/L/洋>	4	—	—	—	4	—	—
<DK/L/和>	3	—	—	—	3	—	—
<DK・L/和>	15	1	1	2	10	1	—
<DK・L・和>	18	3	—	6	7	1	1
<DK・和・L>	10	—	—	5	1	4	—

だんらんに基本をおきつつも、雑多な生活行為を集中させ、公私機能分化を調整する場となっているのがわかる。プランタイプで見ると、<DK/L/洋>、<DK/L/和>、<DK・L/和>でもっとも転用され易い。<DK・和・L>は特別な傾向を示し、Lは洋風接客室となりやすいといえる。

(3) 1階洋・和室

DKやLに隣接する1階居室の主たる使われ方は、<DK-L>では、就寝・接客・家事である。<DK-和>では、さらにだんらんが加わる(表3-3)。

<表3-3> 1階居室の使われ方

主たる行為 重なる行為 プランタイプ	計	就 寝				接 客		家事	だんらん	居室
		無	家事	接客	接客 家事	無	家事	無	その 他	無し
計	54	3	7	4	8	4	11	5	8	4
<DK・L>	4	—	—	—	—	—	—	—	—	4
<DK/L/洋>	4	1	2	—	—	—	1	—	—	—
<DK/L/和>	3	—	—	1	1	—	—	1	—	—
<DK・L/和>	15	1	1	—	2	4	5	2	—	—
<DK・L・和>	18	1	2	3	4	—	5	2	1	—
<DK・和・L>	10	—	2	—	—	—	—	—	7	—

就寝室としての使用がもっとも多いが、それが専用化しているのは3戸のみであり、家事や接客に転用されやすい。この場合の就寝は例外なく夫婦の就寝である。夫婦就寝のプライバシー要求があまり強くない一方で、縫い物や趣味・内職の場や気のはる来客の接客の場の確保要求が強いため、1階居室が転用される。プランタイプで見ると、<DK・L/和>では、1階居室がとくに接客室となりやすく、15戸中9戸を占める。このうち5戸は家事にも転用されるが、5戸のうち3戸は、DKやLを主たる家事の場としており、1階居室の家事室としての転用度は低い。

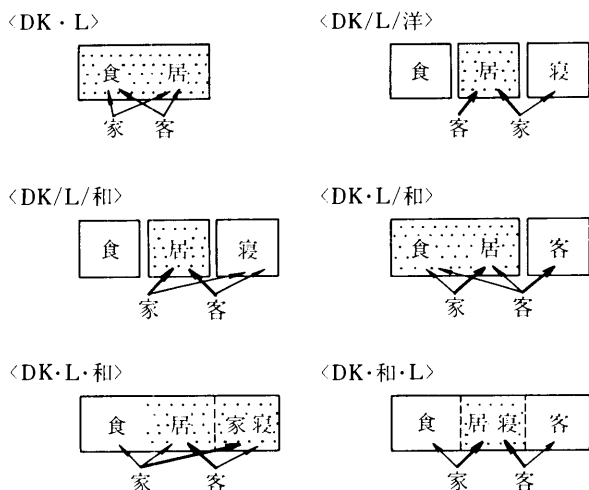
DKやLは、食事やだんらんの場として定着したうえで中間的私生活行為にも転用されるのに対して、1階居室は使われ方のパターンが多様である。

2. プランタイプ別の公室空間の機能分化

(1) プランタイプ別1階の使われ方

以上の1階各室の検討から、1階公室空間の使われ方は、プランタイプの影響を受けやすいことがわかったので、ここで、プランタイプ別に1階部分の機能分化の傾向を概括してみよう(図3-1)。

〈図3-1〉 公室空間の専用性・転用性



(注)「食」とは食事、「居」とはだんらん、「客」とは接客、「家」とは家事を指す。

① <DK・L>

公室空間の広がりにはDKとLのみである。食事とだんらは、DKとLに機能分化するが、接客と家事は機能分化しない。DK、Lともに接客と家事に使われており転用性は高い。

② <DK/L/洋>

食事とだんらはDKとLに機能分化する。家事の一部は洋室でも行なわれる。DKは食事に専用化し、洋室は就寝と一部の家事に使われるのみであり、逆に、Lには生活行為が集中し、転用性が高くなる。部屋が壁で仕切られていて、それぞれの部屋の独立性は増すが、各室への出入りが煩雑となり、特定の部屋つまりLに利用が片寄るためである。

③<DK/L/和>

基本的には②の場合と同様な使われ方となる。

④<DK・L/和>

食事・だんらん・接客の機能が、それぞれ、DK、L和室に比較的明瞭に分化する。和室はとくに気のはる来客のための接待室となり、一部の家事に転用されるのみで、専用性が高い。DK、Lはいずれもよく転用される。このプランタイプでは、和室を来客を通す部屋としてつねにきれいにしておくのとは対照的に、Lは家族の集まり部屋となり、少々物が散らかっても気にならない使い方がなっている場合が多い。Lの起居様式が、ユカザ、イス

ザが入りみだれた形になることが多い。

⑤<DK・L・和>

食事・だんらん・接客あるいは家事の機能が、それぞれDK、L、和室に分化する。和室は就寝にも転用されやすい。和室は、縫い物や趣味・内職などの家事の場と一部の接客の場として使われ転用性が高い。Lはだんらんと接客の場として使われ、一部の家事にも使われる。Lと和室の両方間で転用性が高くなる。

⑥<DK・和・L>

公室空間はDK、和室、Lへと広がり、食事、だんらん、接客は機能分化するが、とくに真中の和室へは生活行為が集中し、和室の転用性は高くなる。

(2) 1階部分の機能分化の傾向

1階部分の主たる行為は、食事・だんらん・接客・家事及び夫婦の就寝である。食事・だんらんの機能分化は定着しているが、プランタイプによって住み方が強く影響を受けることも無視できない。1階がDK、Lのみの場合は機能分化は不可能で、当然DK、Lの転用性が高まる。公室空間がDKやLから和・洋室へと拡大する場合でも、各室が壁で仕切られ独立している場合はうまく機能分化がすすまず、Lへの諸行為の集中が起こる。この要因の1つは、家事や接客の種類に応じて各室を使い分ける場合、一連の家事行為を連続して行ない主婦の家事労働の円滑化をはかろうとする面が強いが、各室が独立しているとこれができずに、特にLへ生活行為が集中してしまうことによる。もう1つは、だんらんの形態からみても、生活時間のすれ違いからできるだけ接触時間をとることが求められるため、独立した各室に諸行為が分かれるのではなく1室へと集中してくると考えられる。

公室空間が1階居室も含めて拡大する場合のうち、DKLが連続し、和室が独立する<DK・L/和>では、独立した和室が日常生活行為にはあまり使われず、接客室として専用化しやすい。不意の来客の時にも使える接客室が確保できるので、DK、Lは家族の生活の場及び主婦の家事労働の場としての性格を強める。<DK・L・和><DK・L/和>では、1階全体が日常の家族の生活によく使われる傾向が顕著である。しかしDKとLとの間に和室がある<DK・和・L>では、真中の和室がユカザ指向の強い家事・接客に使われ易く、かつDKに隣接することから、だんらんにも使われ易くなるため、機能分化はもっともすすみにくくなる。

3. 1階空間の独立度・連続度

部屋の境が壁で仕切られているか、開口部があり連なっているかが、部屋の専用性・転用性を左右する大きなファクターであることがわかった。そこで、公室空間が拡大して、2室以上が空間的に連続して使われる住み方

が、実際どの程度あらわれているか検討しておこう。暖冷房の大型化が、それを促す大きな要因の1つであるとも考えられるので、平時と暖冷房時に分けてみる。

(1) 平時の間仕切り状態

平時の間仕切り状態を示したのが<表3-4>である。

<表3-4> 平時の間仕切り状態

間仕切りの状態 プランタイプ	計	DK	DK	DK	DK
		計	計	計	計
計	54	9	27	2	16
<DK・L>	4	—	4	—	—
<DK/L/洋>	4	4	—	—	—
<DK/L/和>	3	3	—	—	—
<DK・L/和>	15	1	14	—	—
<DK・L・和>	18	1	6	2	9
<DK・和・L>	10	—	3	—	7

(注) : 間仕切閉鎖 (壁も含む) : 間仕切開放 (間仕切無しも含む)

「間仕切閉鎖」とは、2室間が壁で仕切られている場合及び2室間の可動間仕切を閉じる場合を指し「間仕切開放」とは、2室間に間仕切がない場合及び2室間の可動間仕切を開けて使う場合をいう。プランタイプ別にそれらの状態がどのようにあらわれているかみてみる。

平時の間仕切り状態をプランタイプ別にみると、まず<DK/L/洋>と<DK/L/和>は、各室が壁で仕切られ独立している。<DK・L>では、全戸で、DKとLが連続している。<DK・L/和>では、15戸中14戸までDKとLが連続している。<DK・L・和>では半数でDK、L、和室の全体が連続しており、連続性が強いといえる。Lと居室が連続するものは、あわせて18戸中11戸ある。<DK・和・L>では、10戸中7戸で、DK、和室、Lの全体が連続している。1階の各室のうち、間仕切の開放が可能なプランでは一般に連続して使われる傾向が強い。

(2) 暖房時の間仕切り状態

各室の主要な暖房器具をまずみる(表3-5)。

<表3-5> 公室空間の暖房器具

各室	暖房器具 戸数	室 暖 房		室+局所暖房		局所暖房	無	居室無し
		ストーブ	ヒーター	ストーブ	ヒーター	コタツ		
DK	54	31	2	—	—	1	20	—
L	54	17	6	1	11	3	10	6
居室	54	9	1	1	6	—	8	25

DKに暖房器具を置かないものが37%あるのが注目

される。暖房器具を置く場合の器具の種類は圧倒的にストーブである。Lには89%まで暖房器具が置かれており、Lが家族の生活の場としてよく利用されることを裏付けている。器具の種類は、ストーブが60%、コタツが50%、ヒーターが21%使われている。暖房の方法では、室暖房のみが50%あるが、残りは局所暖房との併用あるいは局所暖房のみであり、洋室のLであってもコタツが使われやすいのが注目される。居室に暖房器具を置くものは50%であり、器具の種類ではコタツが使われやすい。

公室空間内の暖房器具と暖房範囲との関係をみてみよう。暖房器具が2種類使用される場合は、もっとも主要な器具について分析してみた(表3-6)。

<表3-6> 暖房器具と暖房範囲

暖房の範囲 プランタイプ	計	ストーブ			ヒーター			コタツ			
		S	H	K	S	H	K	S	H		
計	54	13	2	2	23	4	1	3	2	3	1
<DK・L>	4	—	—	—	4	—	—	—	—	—	—
<DK/L/洋>	4	3	—	1	—	—	—	—	—	—	—
<DK/L/和>	3	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—
<DK・L/和>	15	2	—	—	10	3	—	—	—	—	—
<DK・L・和>	18	5	—	1	5	1	—	1	1	3	1
<DK・和・L>	10	2	—	—	4	—	1	2	1	—	—

(注) Sとはストーブ、Hとはヒーター、Kとはコタツを指す。

は暖房範囲を示す。

プランタイプ別にみると、<DK・L>と<DK・L/和>では、公室空間の中心となるDKとLを連続して暖房するものももっとも多く19戸中17戸を占める。主たる暖房器具はストーブである。<DK・L・和>でもLと和室の間仕切を閉鎖して、DKとLを連続するのが18戸中6戸ある。<DK・L・和>ではさらに、Lと和室を連続するものが2戸あり、DK、L、和室の全体を連続するものが4戸あるのが注目される。<DK・和・L>では、DKと和室を連続するものが多い。公室空間内では冬期においても大型暖房器具を用いることによって、DKとし、あるいは、Lと和室の2室を連続するか、さらに徹底する場合は、DK、L、和室の3室を連続させる住み方が多いのがわかる。

(3) 冷房時の間仕切り状態

冷房器具が置かれているものは83%あり普及率が高い。置かれる場所は、<<DK-L>>ではL、<<DK-和>>では和室である。冷房の範囲は、DKとLが開放可能な

場合は、ほとんど例外なくDKとLを連続させている。
 <DK・和・L>では、全戸でDKと和室を一体化して
 いる。

IV 起居様式

住空間全体に、イスザ化がどの程度すすんでいるのか
 という点に注目した起居様式の態様と公・私室の機能分
 化の関係を検討してみる。

1. 就寝様式

(1) 子供の就寝様式

子供の勉強についてはイスザがほぼ定着しており、こ
 こでは就寝の傾向についてみる(表4-1)。

<表4-1> 子供の寝床様式

子供年齢	寝具	計(人)	シングル ベッド	2 段 ベッド	ベビー ベッド	ふとん
計(人)		112	22	27	4	58
幼 児		37	1	11	4	21
小 学 生		37	6	12	—	19
中 学 生		14	4	4	—	6
高 校 生		12	5	—	—	7
大学生以上		12	6	—	—	6

子供112人のうちベッド使用者は47%であり、この
 割合は子供の年齢にかかわらずほぼ一定である。使用
 されるベッドの種類では、子供の年齢によって違いがあ
 り、小学生以下では2段ベッド、中学生では2段ベッ
 トあるいはシングルベッドが中心である。高校生以上では
 全員シングルベッドである。私室確立とベッド使用との
 関係は深く、中学生以上の子供のベッド使用の場合は、
 子供室が100%私室化している。小学生以下の子供でも
 ベッド使用者(ベビーベッド使用者を除く)30例中25
 例(80%)で子供室が私室化している。2段ベッドの
 使用によって小学生低学年以下の子供を含む2人用就寝
 室の私室化が促されると考えられる。

(2) 夫婦の就寝様式

夫婦のベッド使用率は、世帯主か主婦のいずれか一方
 のみがベッド使用の場合も含めて15%のみであり、大

<表4-2> 夫婦就寝の起居様式

世帯主年代	寝具	計	ベッド	ふとん
計		54	8	46
20才代		1	—	1
30才代		24	6	18
40才代		22	2	20
50才代		5	—	5
60才以上		2	—	2

多数は、ふとんを使用している(表4-2)。世帯主の
 年代別にみると、30代の若い夫婦ではベッド使用率が
 若干高くなり25%みられる。夫婦寝室の私室確立とベ
 ッド使用との関係を見ると、ベッド使用の8世帯のうち
 6世帯の寝室は、2階にとられる寝室に専用化した私室
 である。夫婦のベッド使用は、子供の幼ない若い夫婦で
 2階にまだ子供室が少なく、夫婦寝室をとることができ
 る場合に限ってみられるといえる。夫婦就寝のベッド使
 用は、住み方全体の公・私室分化の傾向とかかわりが深
 い。

2. 1階の起居様式

1階のDK, L, 居室の起居様式を(表4-3)に示

<表4-3> 1階公室空間の床面様式

各 室	戸 数	イスザ	折 衷	ユカザ	居室無し
DK	54	53	1	—	—
L	54	13	37	4	—
1階居室	54	3	7	40	4

している。DKではイスザが定着し、Lでは折衷がもっ
 と多く69%あり、1階居室ではユカザが80%を占
 めている。

プランタイプとの関係でさらに詳しくみる。(表4-
 4)はDK, L, 居室の起居様式の組み合わせのパター
 ンをイスザ, 折衷, ユカザの変化の少ないものから、段
 階的に変化するもの、さらにはイスザからユカザへとい
 うように変化の大きいものへと順に並べ、それらとプラン
 タイプとの関係を示している。

<DK・L>では、4戸ともDKとLの起居様式のバ
 ターンは異なっており、Lの折衷やユカザ傾向が強い。

<DK/L/洋>では、DKがイスザ、Lが折衷であ
 るが、1階洋室がイスザと折衷の2つに分かれる。



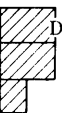


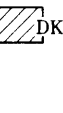

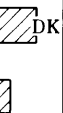
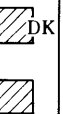
<DK/L/和><DK・L/和><DK・L・和>
 は1階に和室があるという点で共通しており、DKがイ
 スザ、Lが折衷、和室がユカザというように、イスザか
 らユカザへと段階的に変化するパターンが最も多く86
 %を占めている。




<DK・和・L>では、DKがイスザ、和室がユカザ
 Lがイスザというように公室空間内での起居様式が大き
 く変化するパターンがもっとも多く、60%ある。

次に、プランタイプごとの起居様式のパターンの特徴
 が公室空間の機能分化及び専用性・転用性とのように
 かかわっているかについて検討する。

DKではイスザが定着しており、DKテーブルは食事
 以外に気軽な客の接客用や記帳などの家事用にも転用さ
 れやすい。Lは主として折衷である。Lには54戸中
 50戸までソファやイス類が入っているが、起居様式は

〈表4-4〉 公室空間の起居様式のパターン

変化の仕方 起居様式 のパターン プランタイプ	計	段階的に変化するもの ←————→ 段階的に変化しないもの									
			 DK	 DK	 DK	 DK	 DK	 DK	 DK	 DK	 DK
計	54	1	1	—	3	25	6	2	7	3	7
<DK・L>	4	1	1	—	1	—	—	1	—	—	—
<DK/L/洋>	4	—	—	—	2	—	—	—	2	—	—
<DK/L/和>	3	—	—	—	—	2	—	—	1	—	—
<DK・L/和>	15	—	—	—	—	12	1	—	1	—	1
<DK・L・和>	18	—	—	—	—	11	4	—	3	—	—
<DK・和・L>	10	—	—	—	—	—	—	1	—	3	6

(注)
 イスザ
 折衷
 ユカザ

折衷が主である。Lでの主たる行為はだんらんであるが、だんらは単一の行為ではなく、家族員がさまざまな行為をしながらコミュニケーションするという複合的行為であり、家族員各々が、行為に応じてソファなどのイス類にすわったり、床にじかにすわったり、ねころんだりといった姿勢を使い分けている。またLは、日常の接客や家事にも転用されるが、接客はイスザ、家事はユカザになりやすい。こういった雑多な行為に転用されること、各人が起居様式を使い分けることが、Lの折衷化の一因である。また暖房の影響も大きく、冬期にLにコタツを置く世帯が44%あることもLの折衷化の一因である。しかし、<DK・和・L>では、Lが接客室化の傾向を強めるのでイスザが7割を占めている。さらにLに隣接する1階和室をみると、ここはユカザのまま使われ易い。1階和室は、就寝や接客、家事のいずれかに転用される場合がもっとも多く、和室の転用性が生かされている。各行為ごとにとみると、接客については、接客行為自体が応対・食事・宿泊という3種類の行為を含んでおり、これらに転用できる「座敷」が求められる。また、主婦の和裁や茶道、花道、書道などの和風の趣味にも、和室が必要とされる。1階の和室は、こういったユカザ指向の強い行為のための場として重要な役割を果たしている。公室空間が和室へ拡大する要因の1つはこの点にある。

1階の公室空間内の諸行為に応じたイスザ、折衷、ユカザの使い分けは、公室空間内の機能分化の仕方とのかかわりが深い。公室空間がDK、Lのみであり、1階に和室のない<DK・L>では、DKやLがユカザ指向の強い行為にも転用されるため、DKが折衷化したりLがユカザ化するものが4戸中1戸ずつみられる。<DK/L/洋>では、1階居室が洋室であるためユカザ指向の

強い接客や家事には使えず、Lに生活行為が集中し、Lが折衷化する。<DK・和・L>では、和室がDKに隣接しているためだんらんの場として使われやすいが、ユカザ指向の強い接客、家事にも使われやすく、和室に生活行為が集中している。<DK/L/和><DK・L/和><DK・L・和>では、イスザ傾向の強い行為が、DKで行なわれ、ユカザ傾向の強い行為が和室で行なわれる。両者の中間に位置するLでは、これら以外の行為がイスザやユカザで行なわれるためLが折衷化する。公室空間全体では、食事・だんらん・接客・家事といった諸行為の機能分化は、DKのイスザからLの折衷、さらに和室のユカザへと至る起居様式の段階的な変化と結びついてすすむ傾向が強い。

機能分化とのかかわりに加えて、イスザのDKとユカザの和室との間に位置するLが折衷化するということは公室空間内を移動する場合に、イスザからユカザへの急激な姿勢の変更を和らげ、移動を楽にするという側面もあり、これも折衷化を促す要因である。

V 公・私室分化に関する住み方の型

これまですすめてきた1階各室の使われ方の分析と起居様式の分析をもとに、公・私室分化に関する住み方の型を概括し、それとプランタイプとの関係を明らかにする。

1. 住み方の型

1階部分のDK、L、隣接和・洋室における住み方の展開をマクロに型分けすると、大体つぎの3つになる(図5-1参照)。

〈図5-1〉 住み方の型

	住み方の模式図		型分けの指標との関係			
	1階	2階	公私分離 プランの対応	公的生活行為の分化	だんらんの起居様式	
公私分離型			公私分離	LDKが 公室	食事 だんらんの 分化	イスザ or 折衷
公室専用型			公私分離	1階全体が 公室	食事 だんらんの 接客 の分化	折衷
公室拡大型			公私重複	1階が 公室 公・私 重複室	食事 だんらんの 接客 の分化	折衷
公私生活集中型			公私重複	1階が 公室 公・私 重複室	食事 だんらんの 接客 の分化	ユカザ

●食事 ●だんらん ●接客 ●家事 ●夫婦寝室 ●子供室
 →転用 --→程度の少ない転用 □公室群
 ≡間仕切閉 — 間仕切開閉の両方 ----間仕切開

(1) 公私分離型

公的生活行為と私的生活行為が明確に分離し、しかも前者はLやDKに、後者がその他の居室に対応している住み方である。

DKは主として食事、Lは主としてだんらんに使われるが、L、DK全体が家事や接客にも使われる。つまり、就寝などの私的生活行為以外のさまざまな行為に転用されている。LとDKの間仕切を開放し得るプランでは、部屋の連続的な使い方と転用性の高さなどが結びついている。開放し得ないプランでは、DKが専用化されるかわりに、Lに生活行為が集中し、Lの転用性がきわめて高くなる。起居様式は、DKがイスザ、Lが折衷になりやすい。Lは接客室としても重要であるため、しつらえの点では、応接セットがきちんと整えられている場合が多いが、実際の起居様式は、折衷であるのが特徴的である。

この住み方は、1階がLDKのみであるプランタイプ、1階の各室が壁で仕切られた洋室のプランタイプに多い。また、家族人数が5～6人の私室要求が強い家族に多い。

(2) 公室拡大型

公室がL、DKと隣接居室に拡大することによって、食事・だんらん・接客という主要な公的生活行為の分化を促している型である。Lと隣り合う和(洋)室の使われ方の違いによって2つの型に分かれる。

① 接客室専用型

公的生活行為と私的生活行為は明確に分離する。L、DK、和(洋)室を公室群とするならば、その中でDKは主として食事、Lは主としてだんらんに、和(洋)室は主として接客に使われ方が分かれるものである。和

(洋)室は、寝室などの私的生活行為には使われないが、家事などにはかなり転用化される。

間仕切の点では、L、DKは、一体化して使われやすい。和(洋)室は、Lと壁で仕切られるものと引き違い戸で仕切られるものがある。前者で、接客室への専用化が強くなる。しかし、後者の場合でも接客室専用化がないわけではない。この場合、間仕切は常に閉じられた状態になっていることが多い。起居様式は、DKはイスザ、Lは折衷、和室はユカザという3様式から成っている。和(洋)室が接客室として専用化の傾向が強くなるにつれて、Lは家族の生活の場への専用化も強まり、応接セットを隅に寄せたり、ソファのみを置いたりして、空間を広くとろうとするしつらえが多くなる。

この住み方は、1階に和(洋)室がある各プラン・タイプに散らばり、家族人数や家族型とも必ずしも関係ない。例数がいちばん多いのもっとも一般的な型である。

② 寝室転用型

子供室は2階に確保されるが、夫婦寝室が1階にとられ、この部屋が接客にも転用されるもので、公的生活行為と私的生活行為が完全に分離しない型である。この型は、2つのタイプに分かれる。ひとつは、2階の居室のすべてが子供室になるため、夫婦は1階和室で就寝せざるを得ないもの。もうひとつは、2階に夫婦寝室を確保する余裕があるにもかかわらず、子供室あるいは老人室との分離要求が強く、1階に寝室がとられるものである。起居様式は、DKはイスザ、Lは折衷、私室はユカザになるものが多い。この住み方は、1階に和室があるプランで、長子が大学生以上の成長した家族や老人同居の家族に多い。

(3) 公私生活集中型

2階の居室は子供室として確保される。DKは、主に食事の場となり、Lは気の張る来客用の洋風接客室となるが、普段あまり使われない。家族のだんらん、気軽な客の対応、家事、夫婦の就寝などのさまざまな生活行為が1階の和室に集中するのが特徴である。起居様式は、DKとLがイスザ、和室がユカザとなり、折衷はみられない。

この住み方は、LDKに和室が隣接するプランでは、老人同居や夫婦の年代が高い家族に限られている。つまり高令家族では、日常生活全般にユカザ指向が強いことのあらわれであろう。しかし一般にはLとDKの間に私室がくる<<DK-和>>型のプランにおいて、この住み方があらわれやすい。

2. 公室の住み方の分化の要因

全体として、公室群と私室群を階上と階下に分け公室群内で食事・だんらん・接客という主要な行為が分化する住み方がもっとも多い。公的空間の1部で公・私

の生活行為が転用される住み方や1階の和室に公・私のさまざまな生活行為が集中する住み方もある。また、ほかには公室群と私室群との分離および、公室群内での機能分化の傾向を強めながらも、それらに至らない食寝分離型的傾向の住み方も含んでおり、このように住み方に多様性が認められる⁹が大きな特徴である。

住み方に多様性が生まれる要因の1つは、プランにおける公室群のまとめ方にバリエーションがあり、それが住み方を規定する点にある。L、DKから構成されるいわゆる「公私室型」のプランも、各室の独立性が高くかつ洋風のしつらえの傾向が強い典型的な公私室型から、DKとLの間に私室が入りこみ、しかも部屋相互を開放的につなぐ型まで、いくつかの変型がある。この違いによって住み方が異なっている面がみられる(表5-1)。

＜表5-1＞ プラントタイプ別住み方の型

	計	公私室 分離型	公室拡大型		公私生活 集中型
			接客室 専用型	寝室 転用型	
計	54	13	26	7	8
<DK・L>	4	3	1	—	—
<DK/L/和>	4	2	1	1	—
<DK・L/和> (3寝室)	9	3	5	1	—
<DK・L/和> (4寝室)	9	1	6	2	—
<DK・L・和> (3寝室)	9	1	6	1	1
<DK・L・和> (4寝室)	9	1	3	2	3
<DK・和・L>	10	2	4	—	4

いま1点は、家族人数や家族型、家族の成長段階によって、公的あるいは私的な住要求に差があることである。家族人数が多い場合には、私室要求が強まるため、公室の拡大よりも、私室の確保が優先される。老人同居や成長した家族では、公・私分離よりも、老人や子供と夫婦の私的生活行為の分離要求が強まる。接客室分化の要求も顕著になってくる。また、だんらんなどの日常生活の場のユカザ指向も強まる(表5-2、5-3)。

＜表5-2＞ 長子年齢別住み方の型

住み方の 型	計	公私室 分離型	公室拡大型		公私生活 集中型
			接客室 専用型	寝室 転用型	
計	54	13	26	7	8
子供無し	3	—	3	—	—
幼児	8	1	6	—	1
小学生	21	9	10	1	1
中学生	7	—	3	2	2
高校生	7	3	3	—	1
大学生	8	—	1	4	3

これら2つの要因が絡み合い、基本的には3つの住み方を生み出している。このうち、公室拡大型が主流を占めている。プランとの関係を見ると、部屋の独立性が高く、しつらえの洋風傾向の強いプランは公私室分離型、部屋の連続性の高い和風傾向の強いものは、公私生活集

＜表5-3＞ 家族人数別住み方の型

住み方の 型	計(人)	公私室 分離型	公室拡大型		公私生活 集中型
			接客室 専用型	寝室 転用型	
計(人)	54	13	26	7	8
2	3	—	3	—	—
3	6	2	2	1	1
4	30	7	14	4	5
5	10	—	7	2	1
6	5	4	—	—	1

中型を生み易い。家族属性との関係では、家族人数が多く家族構成の複雑なものは公私室分離型が多く、家族の成長段階が高いものは、公私生活集中型が多い。

結 論

以上の分析結果を簡単に要約するとつぎのごとくである。

- (1) 今日大都市圏において供給される独立住室住宅は、<2階建形式>のものが圧倒的に多いが、そこでの住み方をみると、2階部分の私室としての独立化は、ほぼ例外なく達成されている。独立住宅における住み方の差異は、主として公室群から成る1階部分のプランの構成の差と対応した、公室の使われ方の差異からきている。
- (2) 1階の使われ方をみると、食事はDK、だんらんはLで行なわれるのが支配的である。家族のコミュニケーションはDKやLで行なわれるものが多い。しかし、接客や家事・更衣などの中間的生活行為は、DKやLを含め、1階全体に拡がっているのが特徴的である。夫婦寝室は1階にとられるのが一般的であるが、専用化されるのではなく、就寝以外に、接客や主婦の家事・趣味の場になるなど昼間は転用されることが多く、それも隣接するLと空間的に一体化する形で、公的性格を帯びる傾向が強い。
- (3) 家事・更衣などの中間的生活行為の現われ方は、断続的、不規則的であり、かつ長時間にわたらないという特徴がある。したがって部屋の転用によって十分対応できるが、必要に応じてプライバシーを確保できることが求められる。全体的にみて部屋の間仕切の開放が可能で、1階各部屋の連続性の高いプランや住み方が多

かったが、これは、基本的には食事・だんらんを中心にDKやLの機能をできるだけ拡大させながら、時と場合に応じて転用をはかっていくという住み方の融通性への配慮が居住者に大きく働いていると考えられる。

(4) 住宅の規模が大きくなっても、公室空間の機能が、DK・L・接客室・家事室などに分化せず、それらのスペースを専用化しながらも、間仕切りを開放し、各室を連続する住み方が多いことには、つぎの3点が要因として働いているとみられる。第1は、DKを中心とした主婦の公室空間での家事労働からみて、部屋が連続化している方が、部屋の行き来が容易となることである。第2は、家族の生活時間がすれ違いやすいので、家族成員が異なったスペースで異なった行為をしながらコミュニケーションをはかるといふ「ながら参加」のだんらん形態から公室空間の連続性が求められることである。

第3には、間仕切りの開放は、暖房時にとくに多くみられるが、これは、大型暖房器具によって、より広い範囲を暖房するという経済性と公室を広く使うという利便性とは結びついているからである。

(5) 起居様式についてみると、1階居室のうち、DKはイスザが支配的である。一方、夫婦寝室に使われる居室は和室が多い。Lは板の間にじゅうたんが敷かれ、ソファに座るといふイスザと、ホームコタツや座ぶとんを使うユカザが同居しているという内容の折衷様式が多い。これは、Lの起居様式をDKに合わそうとすればイスザにせねばならず、私室側に合わそうとすればユカザにしなければならないため、それらの「折衷的」解決を中身として含んでいるとみられる。Lのじゅうたんが、2つの起居様式のバッファー・ゾーンになっている。イスザとユカザが直接隣り合う場合は、立居の変化が激しくなるため、両方の部屋を連続化して使うことは少なくなり、主としてユカザの部屋へ使われ方が片寄って行きやすい。

<研究担当者>

主査 住田 昌二 (大阪市立大学生活科学部教授)

委員 中島香代子

(大阪市立大学大学院生活科学研究科)

三枝小夜子 (" ")

江口 敦子 (" ")

竹田喜美子 (" ")